

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 伊澤敦子

本論文は、1000個以上の焼成レンガを5層に積み上げて、鳥の形の祭火の祭壇を作り上げる、ヴェーダ祭式の中でも規模が大きく、構造が複雑であるアグニチャヤナ（火祭壇構築祭）を扱う。黒ヤジュールヴェーダの3つのサンヒター（T, K, M と略称）と白ヤジュールヴェーダのシャタパタ・ブラーフマナの記述を中心として、式次第にそって克明に分析していく方法をとる。序論と6章からなる本論、結論の3つの部分から構成されている。

序論はアグニチャヤナの式次第の概略、この祭式を記述する3つのサンヒターの関係に関する従来の見解、この祭式そのものの研究史を略述し、本論文の研究方法を提示する。

本論文の中心部分を構成する本論は、この祭式のほぼ全体を6つの部分に分けて分析する。第1章「ukhā 作り」は最終的に祭火として用いられる火を1年間維持するための土器(ukhā)を焼成するまでの儀礼行為を扱う。第2章「動物供犠と潔斎」は、第6章で扱うレンガ積みの直前に祭場に置かれるヒトの頭の清めと、ウマ、ウシなどの家畜の頭を入手するための動物供犠、それに祭主の潔斎を扱う。第3章「ukhā をめぐる行為」は焼成された壺に火を入れる儀礼行為と1年間の維持の方法を扱う。1年間維持した火を、従来の献供のための火と一緒にして新たな家長の火(gārhapatya)とし、その火の場所を作り、敬う行為を第4章「新しい gārhapatya の設置」は扱う。5層に積み上げられた鳥の形の祭壇そのものが新しい献供のための火(āhavanīya)として機能する。「新しい āhavanīya の設置準備」と題する第5章はその祭壇を積み上げる場所の準備のための様々な儀礼行為の記述に充てられ、ヒトなどの頭をその場所の中央に置く行為で終わる。第6章「レンガ積み」はこの祭式のクライマックスとして多くの紙数が費やされている。第1層から第5層までに分けられ、それぞれの層の分析はそれぞれの層で積まれるさまざまな名称をもつレンガごとに細分化される。この章では層ごとにもまとめが付けられ、比較対照の結果の整理と分析を行っている。

結論として、1. 従来はMとKが近い関係にあり、Tは両者と距離があるとされていたが、KはTとも類似する記述を多く伝え、KはMとTの中間的な位置にあることを分析の結果浮かび上がらせた。2. アグニチャヤナの解釈で従来関心の中心であった神格プラジャーパティに対する観念を、3つのサンヒターのレベルとシャタパタ・ブラーフマナのレベルの分析の結果、そして両者の比較をもとに重要な修正点を提起する基礎作業を提示した。

本論文は基本的に文献の訳注研究である。対象とした文献の量と訳的的確さ、分析の精緻さを高く評価することができる。解釈や論の進め方に関して一部指摘された部分もあるが、本論文は確実にアグニチャヤナ研究、ヴェーダ祭式研究に大きな一歩の前進をもたらした。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。